

をする上での大きなテーマとなっている。益軒の語る「養生」の道は「気」の元である「元氣」を保つこと、養うことが根本である。それゆえ本書では、「気」をめぐる思想の重要性が既述の5つの要素を通じた学びの中で説かれている。なお、本書から得る学びに派生して東西の「養生」思想に目を向けてみると、『養生訓』と同時代の西洋にも養生法的な概念 non-natural things (以下、「非自然的物」と訳す)は存在し、これらの概念は古代より伝統医学の下で伝承されていた。医学の発達に伴い、「非自然的物」に基づく議論は下火へと向かっていったが、近世にはピトケアン学派のように機械論を重視する一方、「非自然的物」を含む伝統医学に目を向けた医者たちも多く存在した。古代に典拠を求める眼差し、そして健康状態の中間地帯に予防的・防止的に介入する点など、東西近世の養生観には共通点も多くある一方、東洋の養生観には、一貫して自然の原理と人間身体・精神の原理を統一的に考える「気」の思想が根幹にあるという独自性が認められる。そのような中、本書では一見難解に思われる「気」の思想について、「思」「行」「食」「住」「衣」との関連の中で具体例を伴った解説が附されており、濃密な相関性をもつ「養生」と「気」の思想への理解深化を読み手に促してくれる。

以上、これまで紹介してきたように、本書は文献学のおよび実践的観点から『養生訓』をはじめ

とする諸文献を詳細にテキスト分析した重要な著作であることは言うまでもない。そして「養生」の必要性や、「養生」の現代的意義を分かりやすい筆致で伝える本書は、研究書に留まらず、益軒の『養生訓』がかつてそうであったと同様に、現代人に生きる術を提示する指南書ともなっている。益軒の養生観は儒学的な様相を呈しつつも、彼は『養生訓』において中国医学古典からの引照に終始せず、自分の体験、経験、心得に基づき独自の理論を発展させた。この点においても、『養生の智慧と気』は斬新な視点から『養生訓』における「養生」や「未病」の智慧を新たに捉えた現代における『続・養生訓』と形容してよい労作である。ややないものねだりの読了後の感を記すならば、「養生」の根幹としての「元氣」と、その「元氣」を保つ諸々の気、すなわち「心気」「食気」「精気」「血気」との機微関連への言及や、益軒が生きて重んじた「楽」思想と養生論との関連性についても、現代医学との文脈の中でさらに深く著者の語りに傾聴したいという思いを禁じえなかったが、これらについては著者が以後で論じてくださることをお願いしたく思う。

(光平 有希)

[講談社, 〒112-8001 東京都文京区音羽 2-12-21,  
TEL. 03 (5395) 3410, 2018年11月, 四六判,  
288頁, 1,850円+税]

## Wolfgang Michel-Zaitso 著

### „Traditionelle Medizin in Japan – Von der Frühzeit bis zur Gegenwart“

ヴォルフガング・ミヒェル氏は、フランクフルト出身のドイツ人である。アジアとヨーロッパを中心とする文化交流史、および日本医学史を専門としている。1984年から2010年までの長きにわたって九州大学で教鞭をとり、2004年にはその学術的功績が認められ、ドイツ政府から勲章を受けた。

本書は彼の長年の研究の総決算とでもいうべきものであり、日本を外から、第三者的な目で見

立場にあるミヒェル氏だからこそ書くことができた本だと言える。本のタイトルは「日本における伝統医学」となっているが、内容をより具体的に表すなら、「ヨーロッパと東アジアの交流史における日本の医学」と言っていいたいだろう。そのことは次の二つの点で、本書の際立った特徴となっている。

従来日本医学史は、日本国内における医学の発展を論じていた。中国医学との違いについて

も、「親試実験」という言葉によって、経験主義・実証主義的態度から、日本人や日本の風土に合った医学を生み出したというストーリーが多かった。他方ミヒェル氏は、日本の医学における独自の展開を、ヨーロッパを中心とする海外との交流から考察する。西洋医学との関係についても、一般にはそれが近世以降日本でどのように受容されたか、それが「蘭学」としていかにして発展したかが述べられる。しかしミヒェル氏は、それにとどまらず、当時日本の医学がヨーロッパでどのように受け止められたかも論じている。

このように本書は、たんに新しい知見が豊富にあるだけでなく、日本の医学史に関して、まったく新しい視野を開いてくれる。なかでもとくに興味深い知見をいくつか紹介しよう。

例えば、江戸時代に医学が普及した背景には、世界貿易の拡大に伴う医薬品やその材料の輸入の増大があった。そうしてオランダ人がもたらした種や苗を栽培することで、薬が国内で調達可能になったという。またミヒェル氏によれば、薬種の不足はなおも解消せず、その結果、古方派に見られるように、より単純な処方を開発したり、日本独自の組み合わせを考案したり、服用量を少なくするといった展開が見られた。しかもその間にヨーロッパ人は日本の動植物相を調査しており、それに同行して在来種に関する知識を集積していったことが、日本の本草学の発展につながった。

他方、ヨーロッパにおける東洋医学に関しては、出島を通して、日本とオランダの間に継続的な交易があったため、中国医学の主な情報源は、

実は日本であった。とりわけ江戸末までは、ヨーロッパで出版された医学に関する本の大半は日本に関するもので、また日本の医書には、オランダ語やフランス語に訳されたものもあったという。このように日本が一方向的に西洋医学を受容していたのではなく、西洋も日本から東洋医学を受容していたのである。

明治以降についても、西洋医学の制度的な受容によって、伝統医学が衰退したことは周知の事実であるが、西洋医学によって鍼灸や指圧が再評価されていたことや、清末以後、西洋医学のみならず、伝統医学の近代化、復興、西洋医学との融合などの試みは、中国が日本の先例から学んでいたということも、これまで注目されていなかったことであろう。

こうしたきわめて独自の視点をもちながら、全体としては、日本医療史の非常に優れた包括的通史的な入門にもなっている。取り上げられるテーマは、いわゆる医学のみならず、宗教的治療、民間療法、療養施設、医療制度・政策、他の学問分野との関係等、きわめて多岐にわたっている。従来の日本医学史ではあまり目にする事のなかった図版資料も多く含まれている。

唯一残念なのは、ドイツ語で書かれているため、一般の日本の読者には読めないことである。近い将来、日本語版の刊行が切望される名著である。

(梶谷 真司)

[Kiener Verlag, Clemensstraße 6, 80803 München, TEL. +49 (0) 89/341262, 2017年9月刊, B5判, 399頁, 59.95 EUR (約8,000円) (税込)]